

- 注(1) P. 71 の注(3)参照。
- 注(2) P. 575 の注(4)参照。
- 注(3) P. 489 の「167「榴岡」を「つつじがおか」と読ませるのは何故か」参照。
- 注(4) P. 71 の注(3)。P. 575 の注(5)参照。
- 注(5) 足輕 1 組 (定員 30 名) の長。
- 注(6) P. 170 の注(1)参照。
- 注(7) せのえ。家格御一家。桃生郡深谷鹿股邑で 200 貫の知行を受けていた。「御一家」については P. 66 の注(7)参照。
- 注(8) 桃生郡河南町鹿股にあり、北上川の流れて迫って断崖をなす丘陵、風光が雄大佳鹿であるので、林子平の知己藤塚知明が鹿股字梅木に幽閉された時、欠山を佳景山と雅称した。国鉄女川線にこの名の駅がある。P. 260 の注(4)をも参照。
- 注(9) 仙台東九番丁孝勝寺にある。
- 注(10) P. 398 の「143.天満宮の榴岡への移遷について」参照。
- 注(11) 1 丈 = 10 尺、1 尺 = 0.33メートル。
- 資料 仙台郷土史夜話 (三原良吉)
 仙台民俗誌 (三原良吉。「仙台市史」第 6 巻の内)
 伝説 (三原良吉。「宮城県史」21 の内)

98. 伊達政宗と伊達男

問 「伊達男」というのは、伊達政宗の豪華好みが特に人目をひいたことから始まったのだと聞いています。本当でしょうか。

答 伊達男と伊達政宗とは、全く関係ありません。如何にも尤もらしいこじつけですので、世間にはかなり流布しているかのようですが、何等の根拠もないことであります。

第一の、伊達男の「伊達」は、物事を立て通す意味の語「立つ」の名詞形「立て」に、伊達の漢字を当てただけのものです。

「大言海」(大槻文彦)に、

『だて(名)伊達〔たてだてしきノ上下略シテ濁ル、男ヲ立ツル意。即チ男立、腕立、心中立ナドヨリ移ル。世ニハ政宗卿ノ部兵ノ服装華麗ナリシニ起ルト云ヘド、此語、政宗卿ノ時代ヨリハ、古クアリシガ如シ、且ツ慶長ノ頃マデハ、伊達氏ハいだてト唱ヘタリ〕

(一) 意気アリテ、男立 腕立ツルコト。游侠。俠氣。槍権三重帷子(享保、近松作)^上「サスガハ茶人ノ妻、物数寄〔ものずき〕モ好ク、気モ伊達ニ」(二)ハデナルコト。ケバケバシキコト。又、ミエヲ張ルコト。華美。華奢。豪華。冶遊。艶冶。容冶。(三)ハヤリ風俗。時粧。曾我五人兄弟(元禄、近松作)^四「是サ大罪人ノ墮獄人、此ノ袈裟衣〔けさごろも〕ハ伊達ニ着ルカ、化粧ニ着ルカ」『古語大辞典』(中田祝夫等編)に、

『だて〔伊達〕〔名・形動ナリ活〕

①豪華に振る舞うこと。華美に装うこと。またそのさま。「当世の伊達とて、遊女、ぬめり男のすぐれて夏の暑きに、袷ひとへ物など着をりて汗びたしになる」〈仮名・ひそめ草・下〉。「世に子を持って世帯じみ、なり形をもやつすとや、然らば我が思はずの伊達も自然とやむであろく浄、心中二つ腹帯・三〉。②外見を飾ること。見えを張ること。「鎧を着たは何のため、伊達に着たか、寒さに着たか」〈浄・聖徳太子絵伝記・二〉。「伊達に目は二ついらぬと小十郎(先代萩ノ片倉小十郎。独眼)」〈川柳・柳樽・一八〉

(語誌) 語源については、(1)物事を立て通す意の「立つ(他タ下二)」の名詞形(嬉遊笑覧・大日本国語辞典など)、(2)接尾語「だて」(和訓栞・大言海など)、(3)寛永三年二条城へ天行幸の際供奉の伊達家の家臣の服装が華美であったことから(掃聚叢談など、近世の随筆類)などの説があるが、(3)は寛永中に「だて」という語がひそめ草の用例にみられるように、一般の用語として定着しているので認めがたい。(1)(2)のいずれが妥当か、決定しがたい。

伊達の薄着 厚着をぶかっこうだとして、寒いときにも薄着をすること。「伊達の衣川」(浄・賢女手習并新暦・四)「伊達やただ一つ、帯の結びの角高く」(浮好色万金丹・二)

伊達をこく 身なりやかっこうをめかし飾る。「そちは若いが古風でよい。結句親父は小さい紋で、伊達こくと、二昔も間違うたほめそしり」(洒・遊客年々考)』。

また、「近世上方語辞典」(前田 勇)に、

『だて〔伊達〕

①はで。「じみ」の対。②はでに振舞うこと。③はでに装い飾ること。④気持ちさがさばけていること。⑤見えを飾ること。』とある通り、「伊達」の語と「伊達政宗」や「伊達家」とは、いささかの関連もありません。

次に、「伊達政宗」の「伊達」姓は、伊達家の祖中村朝宗が、文治5年〔1189〕、源頼朝から伊達〔いだて〕郡を賜わり、常陸国伊佐中村から、本拠を移して以来の在地名なので、「伊達」は本来「いだて」⁽⁵⁾と称するのであります。「伊達男」の「だて」と、「伊達氏」の「いだて」とは、もともと何のかかわりのないことは、これによって明白であります。

なお、「伊達男」について「仙台郷土研究」復刊第2巻第1号の内の、ディスカッション記録「政宗一きょうと明日」の要所を、念の為め書き添えて置きます。

『小林清治〔福島大学教授。「伊達政宗」の著者〕言語学専門家ではありませんが、大言海という辞

典を出された大槻文彦先生、仙台藩士ですけれども、この方の説によりますと、ダンディの伊達、はではでしい伊達ですね、男伊達これは立てるといふか、男立、心中だて、義理立の立てるからきてい
る。伊達の場合と関係ないと思います。伊達の場合は「いだて」からきている。もともと出羽国は
「いでは」で、出るというのを「いでる」ともいいます。はではでしいダンディの伊達と、仙台の伊
達とは系譜的に違うものです。政宗がローマに出した公文書、国書によりますと「いだて政宗」です
ね。ただし秀吉から政宗にきた手紙にはダテ左京大夫となっています。両方を使った。いずれ直接的
な系譜からの関係はないというのが定説のようです。

佐々 久〔仙台郷土研究会長〕 ダテというのはつきづきし、たてたでしい、わざとらしいというの
か、伊達男、伊達姿、力のない者が少しきばった奴、旗本と喧嘩をすれば負けるのをわかっていてが
んばる奴、これが伊達男、伊達姿とは金のない奴がはでなことをするのをいう。明治になってから政
宗にくっつけます。なぜかという。「昔谷風今伊達模様」という端唄〔はうた〕があります。「わし
がくにさ」⁽⁹⁾にくっつけたものが多いのではないか、「わしがくにさ」は誰が作ったか、あれは明治以
前にはなかったのです。どうも大槻如電⁽¹⁰⁾でないかと思うのです。大槻文彦の兄さんで、三味線も上手
ですし、なかなかの遊び上手な人ですから如電さんが「わしがくにさ」を作り、伊達模様と伊達がく
つつくようになったのではと思います。』

注(1) P. 170 の注(1)参照。

注(2) P. 110 の注(4)参照。

注(3) P. 74 の注(1)参照。

注(4) P. 463 の「159.伊達氏の故地伊佐荘中村とは何処か」参照。

注(5) P. 171 の「77. - 「伊達」の正しい読み方」参照。

注(6) P. 130 の「59. 谷風-初代・2代」参照。

注(7) 江戸初期から元禄頃まで流行した大形の華奢〔かしゅ〕な衣服の模様。縫箔・鹿の子染など
を用いて作った。

注(8) 近世俗曲の一。三味線を伴奏として歌われる短い唄。上方端唄が始まりで、文化以降江戸で
多くの新曲が行われ、舞踊とも結合した。

注(9) 今「仙台端唄」といわれるもので、『わしが国さで見せたいものは、昔谷風今伊達模様…』
とある。この歌詞の始めの「わし」は「日本国語大辞典」に『(「わたし」の変化したもの)
自称。近世主として女性が用いた。現在では尊大感を伴って目下の者に対して、男性が用い
る。関東以西でのみ。』とある。この歌詞の成立年代と場所とが、およそ推定できる。

注(10) P. 4 の注(5)、P. 110 の注(4)参照。

資料 大言海 (大槻文彦)

古語大辞典 (中田祝夫等編)

大日本地名辞書第7巻 (吉田東伍)

伊達行朝朝臣勤王事歴卷之1 (大槻文彦)

伊達家史叢談卷之1 (伊達邦宗)

99. 「泉嶽村」はどこか

問 「泉嶽村」はどこか。

答 「泉嶽村」⁽¹⁾とは、明治22年4月1日市町村制実施の時、旧来の福岡⁽²⁾・朴沢⁽³⁾・根白石⁽⁴⁾・西田中⁽⁵⁾・小角⁽⁶⁾・実沢⁽⁷⁾の6か村を合併して成立した新村の村名で、8年後の明治30年7月2日「根白石村」⁽⁸⁾と改称しました。この改称の理由についての確たる資料はないのですが、「泉市誌」上巻に『泉嶽村という山を冠した村名は対外的に好ましくないとして改称したと巷間に伝わっていた。』と記されています。

その後、この根白石村は、昭和30年4月10日、七北田村⁽⁹⁾と合併して泉村となりました。泉村は、昭和32年8月1日町制を施行、更に昭和46年11月1日市制施行、泉市となり、人口13万、仙台市に次ぐ県内第2の大都市に成長発展しました。

注(1) 「根白石村史」(根白石村)に、『明治二十二年四月一日町村制実施に際し、根白石・福岡・朴沢・小角・西田中・実沢の六か村が合体して泉嶽村となった。明治二十五年の人口五、〇〇二戸数五五〇。泉嶽の山麓に位置し、山林原野の面積が非常に多い農山村であった。明治三十年七月二日村名を根白石村と改称した。』とある。

「新撰宮城県分界地図」(遠藤忠太郎。明治26)に「泉嶽村」が図示されている。P. 452の「156「泉ヶ岳」の表記」参照。

注(2) 「泉市誌」上巻に『福岡村(古くは婦古岡邑ともある)。泉ヶ岳全山から長谷倉川・七北田川右岸を根白石村〔旧〕境と花輪川左岸までと市域中最広範にわたっている。泉ヶ岳は、往古萱野嶽とか白石嶽・旭嶽・泉ヶ嶽などと呼称された。さらに往古は、続日本紀に五道の内の鷲座^{わしくら}とあるのは今の福岡であるという。泉ヶ嶽山麓ともいうべき村内中央北部長谷倉川(朴沢川)と清川との間に、独立した峨々たる屏風岳がある。西から東に約六〇〇メートルも長く一線の長峰(標高二九一メートル)馬の背様の山頂で、屏風のごとき山容である。この屏風岳の東隣りの山嶺に、古代に祀られたという鷲倉大権現(今の鷲倉神社)がある。仏字には川崎阿弥陀堂と和泉薬師堂があげられる。阿弥陀堂の本尊阿弥陀如来立像は、安阿弥快慶の作といわれるが、この堂は政宗の祖父晴宗の妹懸田御前の墓所ではなかったかとの説がある。懸田御前は晩年川崎に隠棲しここで慶長一三年〔1608〕五月二日没している……。福岡上の原地区の奥地山中(金畑)に相原〔すぎのはら〕氏の屋敷があった。相原氏